第四章　光る源氏の物語　雲林院参籠

［第一段　秋、雲林院に参籠］

大将の君は、宮をいと恋しう思ひきこえたまへど（中宮をとても恋しく慕い申していたが）、「あさましき御心のほどを（中宮の拒む御心がどんなに私を傷付けたかを）、時々は（参内の折には）、思ひ知るさまにも（気付くようにも）見せたてまつらむ（見せ付け申し上げよう）」と、念じつつ過ぐしたまふに（敢えて御供申し上げずに、意固地になって日を送られる内に）、人悪ろく（ただ二条院に籠もっているだけでは自分が世間から見くびられそうで）、つれづれに思さるれば（退屈でもあったので）、秋の野も見たまひがてら（秋の里の散策も兼ねて）、*雲林院（うりんゐん）に詣でたまへり（に参詣なさいました）。　*「雲林院」は≪京都市北区紫野にあった天台宗の寺。はじめ、淳和（じゅんな）天皇の離宮で紫野院（むらさきのゐん）と称したが、のち、元慶寺（がんぎょうじ）別院となった。その後、臨済宗の大徳寺に属したが、廃寺。うんりんいん。うじい。（大辞泉）≫とある。

「*故母御息所の御兄の（こははみやすんどころのおんせうとの）*律師（りし）の籠もりたまへる坊にて（が住持されて居る寺なので）、法文など読み（其処で経文などを読み）、行なひせむ（戒行をしよう）」と思して（とお思いになって）、二、三日おはするに、あはれなること多かり（感じ入る事が多く在りました）。　*注に＜母桐壷更衣の兄。源氏の伯父に当たる。＞とある。　*「律師」は≪僧綱（そうごう）の一。僧正・僧都（そうず）に次ぐ僧官。正・権の二階に分かれ、五位に準じた。（大辞泉）≫とある。「僧綱」は、朝廷から僧に与えられる官職、との事。

紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて（ススキヶ原に秋風が吹いて）、故里も忘れぬべく思さる（大将は二条院も忘れてしまいそうでした）。法師ばらの（また法師たちの中から）、才（ざえ）ある限り召し出でて（学識の高い者を選び出して）、論議せさせて聞こしめさせたまふ（問答を論じ合いさせてお聞きに成りました）。

所からに（そうした場所柄で）、いとど世の中の常なさを思し明かしても（ますます世の無常を思い夜通し考えても）、なほ、「憂き人しもぞ」と（やはり冷たい人ほど諦め切れないと）、思し出でらるる（中宮が思い出されてしまう）おし明け方の月影に（有明の月光に）、

法師ばらの（僧侶たちが）閼伽（あか、仏前の聖水を）たてまつるとて（お供えするために）、からからと鳴らしつつ（薬缶から器にからからと注いで）、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるも（聖水に散らし浮かべるのも）、はかなげなれど（他愛ないが）、「このかたのいとなみは（こうした修行は）、この世もつれづれならず（人生には寿命が在るので）、後の世はた、頼もしげなり（後世の功徳ともなるのだろう）。さも（それにつけても何故に自分はこうも未練を断ち切れずに）、あぢきなき身をもて悩むかな（如何にもならない身の上を何時までも嘆いているのだろう）」など、思し続けたまふ（思い続けなさいます）。

律師の、いと尊き声にて、「*念仏衆生(ねんぶつしゅじゃう、念仏を唱える人々は)摂取不捨(せっしゅふしゃ、皆救われて見捨てられない)」と、うちのべて(法文を長く引き伸ばして)行なひたまへるは(読経なさっているのは)、いとうらやましければ(源氏の出家願望を可也くすぐったが)、「なぞや」と思しなるに(何故に自分が出家できない事が在ろうかと考えてみると)、まづ、姫君の心にかかりて(対の姫君が気になって)思ひ出でられたまふぞ(思い出してしまわれる事が)、いと悪ろき心なるや(源氏の未練がましさでした)。

例ならぬ日数も(いつになく長逗留となって)、おぼつかなくのみ思さるれば(源氏は二条院の様子が心配になって)、御文ばかりぞ(対の姫君にお手紙だけは)、しげう聞こえたまふめる(頻繁に差し向けられていたようです)。

「行き離れぬべしやと(出家するべきかどうかと)、試みはべる道なれど(修行を勤めていますが)、つれづれも慰めがたう(無常観を修め切れず)、心細さまさりてなむ(寂しさばかりを募らせています)。聞きさしたることありて(聞き掛けた教えがあるので)、やすらひはべるほど(まだ修行を続けますが)、いかに(其方は如何お過ごしですか)」など(などと源氏が)、陸奥紙に(高級厚紙に)うちとけ書きたまへるさへぞ(くだけた筆跡でお書きに為った所が)、めでたき(洒落ていました)。

「浅茅生の露のやどりに君をおきて、四方の嵐ぞ静心なき」(和歌 10-18)

「ひとりぽっちにさせちゃって、どうしているかしんぱいです」(意訳 10-18)

*「浅茅生(あさぢふ)」は一般に雑草の生い茂る野原を想起させるが、二条院は宮処の真ん中なので、此処では秋の深まる季節を指している、のだろう。其の寂しい季節に君を一人残して、「四方の嵐(よものあらし、吹きつける風)」に晒された君が如何しているか「静心なき(心配だ)」、という相聞歌。

など、こまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返し、白き色紙に、

「風吹けばまづぞ乱るる色変はる、浅茅が露にかかるささがに」(和歌 10-19)

「しんぱいだっていうんなら、ほったらかしにしないでよ」(意訳 10-19)

*源氏が詠んだ「四方の嵐」を受けて「風吹けば」と詠み出している。また贈歌の「浅茅生の露のやどり」は源氏の二条院なので、「浅茅が露にかかる」は＜源氏を頼りにしている＞という意味になる。詰まりは「風吹けば」頼みの源氏こそが、「まづぞ乱るる色変はる(先に目移りを起こして心変わりする)」と拗ねて見せる。そして、「ささがに」は蜘蛛の別名で他の歌にも良く詠み込まれるが、此処では女君が自分を風に飛ばされそうに頼りない存在という意味で、其の＜浮気な源氏＞に寂しさを訴えているのだろう。家垣の笹が根に糸を張って必死に風を凌いでいる、という情景。

とのみありて(と怨み辛みの重さも無く屈託無い幼ささえ感じられる素直な返歌に)、「御手はいとをかしうのみなり(字だけは随分と上手になる)まさるものかな(一方らしい)」と、

独りごちて(と源氏は独り言を言って)、うつくしとほほ笑みたまふ(可愛らしいと微笑みなさいます)。

常に書き交はしたまへば(頻繁に手紙を交しているので)、わが御手にいとよく似て(源氏は姫の字が自分のものにとてもよく似て)、今すこしなまめかしう(少し柔かく)、女しきところ書き添へたまへり(女らしい所が在るとお思いでした)。「何ごとにつけても(どの点をとっても)、けしうはあらず(欠点無く)生ほし立てたりかし(育て上げたものだ)」と思ほす(とお思いに成ります)。

[第二段　朝顔斎院と和歌を贈答]

吹き交ふ風も近きほどにて(源氏が逗留する雲林院と同じ紫野に在る)、*斎院にも聞こえたまひけり(斎院に就かれた式部卿宮の朝顔姫にも源氏は手紙を差し上げました)。　*注に≪源氏、朝顔斎院と和歌を贈答。朝顔姫君は今年春に斎院に卜定された。一年目は宮中の初斎院にいるはずだが、今、紫野にいる。本来、紫野には二年目に移るべきもの。何かの事情で早まったものか。≫とある。斎院は賀茂社の祭事を勤めるが、普段は紫野院で潔斎生活を送る。

中将の君に(源氏は斎院の女房の中将の君には)、「かく、旅の空になむ(私がこのように旅の空で)、もの思ひにあくがれにけるを(物思いに明け暮れているのを)、思し知るにもあらじかし(御存知ではなかったでしょう)」など、怨みたまひて(愚痴めいた物言いを為さって)、御前には(おまえには、斎院ご本人に宛てては)

「懸け捲くは畏けれども其の上の(かけまくはかしこけれどもそのかみの)、
　秋思ほゆる木綿欅かな(あきおもほゆるゆふだすきかな)　(和歌 10-20)

「昔の事を言い出せば、ふと秋の日を憧れる　(意訳 10-20)

*「懸け捲くは畏けれども(申し上げるのも畏れ多いが)」は、神への奉仕者たる斎院に対する儀礼めかした言い回しで、修辞的に「そのかみ(あの昔)」を「其の神」に見立てた枕詞にもしている。更に「かけまく(斯く曰すも＝こう言うのも)」は、「木綿欅(ゆふだすき、神事の際にお清めに懸けるタスキ)」を「懸け捲く」という洒落詞にも二重に掛けている。「あきおもほゆる」は「飽き思ほゆる＝憧れる」と「秋思ほゆる(秋の思い出の)」の複意で「結ふ欅かな(交わって遊んだ日の事ですね)」に連ながるので、歌意は総じて昔を懐かしむ恋しさ、という事らしい。しかし朝顔の姫君は源氏との情交に応じた事が無い筈なので、昔遊んだと言っても子供同士で遊んだ幼い日を懐かしむということで、歌の体裁は技巧的に修辞した他愛なさ、なのだろう。ただ、それでも神に仕えるべく潔斎する斎院に、昔遊んだ日を懐かしむ歌を贈るということは、明らかに恋慕を訴えているのだから、朝顔姫は真に受けた返歌など出来そうも無い。

昔を今に(昔のように今また)、と思ひたまふるもかひなく(と思っても如何仕様も無く)、とり返されむもののやうに(取り返しの付く物の様には、行きませんね)」と、なれなれしげに(親しげに書いた)、唐の浅緑の紙に(浅緑色の唐紙の手紙を)、榊に木綿(ゆふ、清めの白布帛)つけなど、神々しうしなして(神々しい体裁で)参らせたまふ(差し上げなさいます)。

御返り、中将(中将の御返書は)、「紛るることなくて(他に気が紛れる事も無いので)、来し方のことを思ひたまへ出づるつれづれのままには(昔の事をつらつらと思い出していますと)、思ひやりきこえさすること(貴方様がお手紙を下された事が)多くはべれど(多かったのですが)、かひなくのみなむ(今となっては致し方も御座いません)」と、すこし心とどめて多かり(少し気遣いを見せて字数の多い文面でした)。

御前のは(斎院本人からは)、木綿の片端に(ゆふのかたはしに、布帛の端に)、

「そのかみやいかがはありし木綿欅、心にかけてしのぶらむゆゑ　(和歌 10-21)

「神のお告げを聞く時は、まことをお誓い為されませ　(意訳 10-21-1)

「昔話を出されても、詳しく思い出せません　(意訳 10-21-2)

*この斎院の返歌は源氏の贈歌にある「そのかみ」を受けて詠み出し、「木綿欅」もそのまま返している。それも贈歌がそれらの言葉を技巧的に使った事に比べると、形式的にではあっても全体に複意を含ませていて、A面とB面の二つの歌に成っている。A面は「其の神は如何は在りし木綿欅(其の神のお告げは如何かと聞く為に清めのタスキを)心に掛けて偲ぶらむ故(心に懸けて畏まる)」という所だろうか。そしてB面は「其の上や如何は在りし結ふ襷(其の昔はどの様な約束を交しましたでしょうか)心に掛けて偲ぶらむ故(ずっと心に掛けて来た事など在ったでしょうか)」となる。返歌としてはB面になるだろう。いずれにしても斎院は源氏の恋慕を拒否しているのだが、言ってみれば世俗を断つ為の謹慎生活をしている斎院が、いくら拒絶の内容とはいえ、贈歌に対して俗世の習わしに沿って歌を返してしまうこと自体が、少なからず問題を孕んでいる。実際に、そうした指摘がすぐ後の本文にも語られる。

近き世に(身近な事なので、殊更に言われても当惑いたします)」とぞある(といった御返事でした)。

「御手(お書きになった字は)、こまやかにはあらねど(細部まで気を配ったものではなかったが)、らうらうじう(手慣れて)、草など(そうなど、崩し字などは)をかしうなりにけり(上手になっていました)。まして(さぞや)、朝顔も(あさがおも、斎院のお顔も)ねびまさりたまふらむかし(御手のように美しく成長なされている事だろう)」と思ほゆるも(とお思いに為っては)、ただならず(胸をときめかす源氏は)、恐ろしや(神をも恐れぬ好き者振りでした)。

「あはれ(そういえば去年の)、このころぞかし(この頃だった)。野の宮のあはれなりしこと(野宮で御息所とお別れしたのは)」と思し出でて(と源氏は思い出しなさって)、「あやしう(不思議と)、やうのもの(同じ様に神職つながりに憧れる秋の情緒だ)」と、神恨めしう思さるる御癖の(恋の前には神さえ邪魔者扱いする源氏の御性格は)、見苦しきぞかし(困ったものでした)。わりなう思さば(是非にと望めば)、さもありぬべかりし(朝顔の姫君を妻に迎えることも出来たであろう)年ごろは(この数年は)、のどかに過ぐいたまひて(特に強い思いも持たずにお過ごしに成っていて)、今は悔しう思さるべかめるも(姫が斎院に就いて手出しが出来ない様に為った今頃に成ると惜しい気持ちを抱きなさるのも)、*あや

しき御心なりや(奇妙な御気性でした)。　*源氏のような生まれながらの天子が、人生の手応えを感じるのは禁忌を犯す事ぐらいかもしれない。というような事は以前にもノートしたが、この逆説めいた命題は実に深遠な意味を示している。というような事も以前にノートした気もするが、此処では作者自身が源氏の性格として明示しているので、改めて押さえて置く。即ち、およそ社会的生命体のヒトは社会構成を維持する為に一定の律令を設ける。其の律令は論理によって運営される。しかし社会全体の発展を図るには、論理を超えた価値観によって律令は破られる。まぁ、そんな所か。

院も(斎院も)、かくなべてならぬ(このように一通りではない)御心ばへを見知りきこえたまへれば(源氏のお気持ちを手紙から御汲み取り成されれば)、たまさかなる御返りなどは(たまのお返事などには)、えしも(そう無下に)もて離れきこえたまふまじかめり(取り合わずにも居られなかったようです)。すこしあいなきことなりかし(神職にしては少し分別に欠けたかもしれません)。

六十巻といふ書、読みたまひ(源氏は天台宗の経典六十巻をお読みになり)、おぼつかなきところどころ解かせなどしておはしますを(不明な所を僧侶に解説させたりして御出ででしたが)、「山寺には(山寺にとっては源氏に教えを授ける事が)、いみじき光(大変に輝かしい)行なひ出だしたてまつれり(善行を施している事に為る)」と、「仏の御面目あり(仏教の有難さが示された)」と、あやしの法師ばらまでよろこびあへり(まだ修行もあやふやな法師たちまで喜び合っていました)。

しめやかにて(心を落ち着けて)、世の中を思ほしつづくるに(世の中を考え続けて御出でに為ると)、帰らむこともの憂かりぬべけれど(帰る事も億劫になりそうだが)、人一人の御こと思しやるがほだしなれば(対の姫への気掛かりに引き寄せられて)、久しうもえおはしまさで(これ以上の長居はしない事にして)、寺にも御誦経(みずきゃう、読経の礼として贈る金品のお布施を)いかめしうせさせたまふ(盛大に執り行なわさせ為さいました)。

あるべき限り(寺に居る全ての)、上下の僧ども、そのわたりの山賤まで(やまがつまで、下働きにまで)物賜び(ものたび、贈り物を施し)、尊きことの限りを尽くして出でたまふ(存分な礼を尽くしてお帰りなさいます)。見たてまつり送るとて(大将を御見送り申し上げようと)、このもかのもに(其処此処に)、あやしき(下層の)しはふるひどもも集りてゐて(しわがれ声の老人たちが集まって並び)、涙を落としつつ見たてまつる(泣きながらお別れ申し上げます)。黒き御車のうちにて(故父院の喪中につき黒い御車をお使いになって)、藤の御袂に(ふぢのおんたもとに、喪服姿で)やつれたまへれば(地味に為さっていらしたので)、ことに見えたまはねど(特別な華やかさではなかったが)、ほのかなる御ありさまを(控えめなお姿が)、世になく思ひきこゆべかめり(またとない素晴らしさだったようです)。

[第三段　源氏、二条院に帰邸]

女君は(妻である対の姫は)、日ごろのほどに(源氏が雲林院へ出向いたこの数日の間に)、ねびまさりたまへる心地して(ぐっと大人びた感じで)、いといたうしづまりたまひて(本当にとても落ち着きなさって)、世の中いかがあらむと(今後源氏との仲がどうなって行くの

だろうかと)思へるけしきの(不安げな様子が)、心苦しうあはれにおぼえたまへば(とても可愛らしく感じられたので)、あいなき心のさまざま乱るるやしるからむ(源氏は自分の頼りない気持ちが様々に思い乱れるのを妻が気づいたのだろうかと)、「色変はる(心移りなさる)」とありしも(と歌に詠んで遣した事も)らうたうおぼえて(労しく思って)、常よりことに語らひきこえたまふ(いつもより熱心にお話しなさいます)。

山づとに(山の土産として)持たせたまへりし紅葉(従者に持って来させなされた紅葉の枝は)、御前のに御覧じ比ぶれば(庭先のものと見比べると)、ことに染めましける(一段と鮮やかに赤く染まっていて、山で無常を修めようと試みたのに出家どころか結局はますます強くなった)露の心も見過ぐしがたう(中宮への未練の涙を諦めきれず)、おぼつかなさも(連絡しないのも)、人悪るきまでおぼえたまへば(体裁が悪いほどに大人気なくも思えたので)、ただおほかたにて(ただ普通の季節のご挨拶として)宮に参らせたまふ(中宮に枝を御贈りに為りました)。

命婦のもとに(言伝の文は王命婦の許に遣わされて)、「入らせたまひにけるを(中宮が御所に参内なされた事を)、めづらしきこととうけたまはるに(珍しい事と承りましたが)、宮の間の事(中宮と東宮が御会い遊ばされた時に)、おぼつかなくなりはべりにければ(御供致しませんでしたことを)、静心なく思ひたまへながら(相済まない事と存じ上げましたので)、行ひもつとめむなど(仏門修行をお勤めいたそうと)、思ひ立ちはべりし日数を(予定していました期間を)、心ならずやとてなむ(修行が疎かに為らない様にしていましたところ)、日ごろになりはべりにける(今まで掛かってしまいました)。

紅葉は、一人見はべるに(一人で見ていると)、錦暗う(にしきくらう、折角の色合いも暗く)思ひたまふればなむ(思われてしまいますから)。折よくて御覧ぜさせたまへ(折を見て宮様に御覧に入れてください)」などあり(などと在りました)。

げに、いみじき枝どもなれば(確かに立派な枝振りなので)、御目とまるに(中宮も目を引かれなさったが)、例の、いささかなるものありけり(枝にはまたも小さな恋文が結び付けられていたのでした)。人びと見たてまつるに(女房たちが其れを見つけると)、御顔の色も移ろひて(中宮はお顔の色を変えなされて)、

「なほ、かかる心の絶えたまはぬこそ(まだこうした気持ちをお持ちだとは)、いと疎ましけれ(本当に疎ましい事です)。あたら(せっかくこうして枝を贈り下されて)思ひやり深うものしたまふ人の(思い遣りを深くお持ちの方なのに)、ゆくりなく(不用意に)、かうやうなること、折々混ぜたまふを、人もあやしと見るらむかし(皆も奇妙に思う事でしょう)」と、心づきなく思されて(不機嫌になられて)、瓶に(かめに、枝を花瓶に)挿させて、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ(軒先の柱の下に押し出させてしまいなさいました)。

[第四段　朱雀帝と対面]

おほかたのことども(当たり障りの無い季節の挨拶や事務的な事柄)、宮の御事に触れたることなどをば(東宮に関する事などを)、うち頼めるさまに(よろしくお願いしますと)、

すくよかなる御返りばかり聞こえたまへるを(型通りのお返事ばかりを中宮が御遣しになるので)、「さも心かしこく(素知らぬふりを)、尽きせずも(尽き通す御心算か)」と、恨めしうは見たまへど(恨めしくはお思いに為ったが)、何ごとも後見きこえ(何に付けても大将は中宮と東宮のお世話を申し上げる)ならひたまひにたれば(お役目でしたので、中宮の御見送りに参じないでは)、「人あやしと(皆に奇妙な事と)、見とがめもこそすれ(訝しがられるだろう)」と思して(とお思いに為って源氏は)、まかでたまふべき日(中宮が御所から自邸にお帰りになる日に)、参りたまへり(御所へお出掛けなさいました)。

まづ(御所では先ず)、内裏の御方に参りたまへれば(帝の所に顔を御出しになりましたが)、のどやかにおはしますほどにて(帝は寛いで居らしたので)、昔今の(むかしいまの)御物語聞こえたまふ(お話しを為さいました)。御容貌も(帝のお顔は)、院にいとよう似たてまつりたまひて(院にとても良く似ていらして)、今すこしなまめかしき(此の頃は更に優美な)気添ひて(けそひて、様子が加わって)、なつかしうなごやかにぞおはします(親しげで和やかにして御出でです)。かたみにあはれと見たてまつりたまふ(お互いに懐かしくお思い為さいます)。

*尚侍の君(かんのきみ)の御ことも(と源氏との仲についても)、なほ絶えぬさまに聞こし召し(まだ続いていると御聞きあそばし)、けしき御覧ずる折もあれど(帝ご自身も其れらしくお思いに為る節も在ったが)、　*「尚侍(ないしのかみ)」は≪内侍司(ないしのつかさ)の長官。もと従五位相当、のち従三位相当。天皇に近侍して、奏請・伝宣などをつかさどったが、のちには女御(にょうご)・更衣(こういい)に準じて後宮に列するようになった。しょうじ。(大辞泉)≫とある。詰まりは帝の妃である。二月に右大臣家の六の姫が就任して、実姉の大后が以前使っていた弘徽殿に住んでいたと言う記述が既にあった。帝からすれば実の叔母だが、直系では無いので形式上は他家の女という事で、其れ位の近親婚は問題視されないらしい。ただ、帝が後宮の女を弟の源氏に寝取られた、という事よりも、実質の排斥圧力は大后や右大臣家が源氏を嫌って葬ろうとしている事にある。そして其れは帝も尚侍も源氏も承知している。

「何かは(別に)、今はじめたることならばこそあらめ(今に始まった事でもあるまいし)。さも心交はさむに(そのように心を通わせ合うのに)、似げなかる(似つかわしく無いだろう)まじき(という事も無い)人のあはひなりかし(人の間柄なのだろう)」とぞ思しなして(とでも思うように為さって)、*咎めさせたまはざりける(非難なさる事は在りませんでした)。　*此処で述べられている事は、帝が源氏を咎めない理由にはなっていない。後宮の女といっても、女房たちなら源氏が手を付けてもお構い無しだろうが、帝の妃であってみれば手出しは許されない。まして母后や摂政たる右大臣の意向を思えば、帝は此処ぞと源氏を追放する事は出来ただろうし、寧ろ筋から言えば然うしなければ標しが付かない様に思う。其れにも関わらず源氏や尚侍を難じない帝の気持ちこそが、此処で述べられている。ただし明示では無いので推論だが、恐らく帝は気性の激しい母后よりは温厚な故父院が好きだった。その故父院に可愛がられていた弟の源氏も可愛かった。屈託無い年下の叔母も妹のように可愛かった。それに引き換え帝たる自分に高圧的な母や右大臣には反感があった。しかし彼等は同時に圧倒的に頼りに成る存在でもあった。何時までも子供の時のようにじゃれ合っては居られなかったが、帝が源氏や尚侍に息抜きを求めたとしても無理は無いように思える。其の屈折した見て見ぬ振りが、此処で語られているのだろう。

よろづの御物語(色々とお話し為されて)、文の道の(漢学で)おぼつかなく思さるることどもなど(帝が分かり難くお思いの事などを)、問はせたまひて(源氏にお尋ねになったり)、また、好き好きしき歌語りなども(また恋の歌詠みなども)、かたみに聞こえ交はさせたまふついでに(お互いに打ち明け合いなさる内に)、かの斎宮の下りたまひし日のこと、容貌の(別れの櫛を帝自ら挿して差し上げたときの御顔が)をかしくおはせしなど(美しかった事などを)、語らせたまふに(お話しなさったので)、我もうちとけて(源氏も気を許して)、野の宮のあはれなりし曙も(野の宮で御息所と語り明かした惜別を)、みな聞こえ出でたまひてけり(隠さずお話し申し上げてしまいました)。

*二十日の月、やうやうさし出でて、をかしきほどなるに、「遊びなども、せまほしきほどかな」とのたまはす(九月二十日の月がようやく照り出して良い風情の時分だったので帝は「楽器の演奏でもしたいところだな」と仰います)。　*注に≪九月二十日の月。午後十時頃に出る。≫とある。どうやら月齢二十日の月の出は略 21：00〜22：00 らしいが、月の出は一日後だと約 50 分くらい遅くなる。理屈では月陰暦は地球の自転を月の朔望で数えるので、地球の自転が一日当たり 24 時間として、新月から次の新月までを 30 日とすれば、一日当りのズレは 24÷30×60 分＝48 分となる。ところで夜の十時は可也の夜更けで其れ以降の行動が制限されそうだから、公文書では無いので記述の二十日を限りの良い数字を言っているとすれば、実際は十八、九日の 7：00〜8：00 くらいだったとも考えても良さそうだ。

「中宮の、今宵、まかでたまふなる(お帰りになるそうで)、とぶらひにものしはべらむ(御見送り致そうと存じます)。院ののたまはせおくことはべりしかば(院の御遺言なされた事で御座いまして)。また、後見仕うまつる人もはべらざめるに(他に御世話申し上げる者も居りません様ですので)。春宮の御ゆかり(東宮のご縁故が頼りないようなので)、いとほしう思ひたまへられはべりて(心配致している所です)」と奏したまふ(と源氏は帝にお応えなさいます)。

「春宮をば、今の皇子(いまのみこ＝今上帝の御子、自分の養子)になしてなど(にするようにと)、のたまはせ置きしかば(院が御遺言されたので)、とりわきて心ざしものすれど(特に東宮の事は気に掛けているが)、ことにさしわきたるさまにも(今是といって)、何ごとをかはとてこそ(何かが必要とも、思えない)。年のほどよりも(年の割には)、御手などのわざとかしこうこそものしたまふべけれ(字など特に上手にお書きに為るようだ)。何ごとにも、はかばかしからぬみづからの(不調法な私の)面(おもて)起こしになむ(面目を施してくれるだろう)」と、のたまはすれば(帝がお話し遊ばすので)、

「おほかた(大体は)、したまふわざなど(為さる事が)、いとさとく(とても聡明で)大人びたるさまにものしたまへど(大人びた様子にして御出でですが)、まだ、いと片なりに(何分にもまだ御幼少ですので)」など(などと源氏は)、その御ありさまも奏したまひて(東宮の御様子を帝に報告なさって)、まかでたまふに(御前を退がり為さいましたが)、

大宮の(母后の)御兄の(おんせうとの、兄君の)*藤大納言の(とうだいなごんの、藤原氏の筆頭参議の)子の、頭の弁といふが(頭の弁を勤める者が)、世にあひ(右大臣家支配の時流に乗った)、はなやかなる若人にて(今を時めく若者で)、思ふことなきなるべし(何を憚

る事も無いといった風に)、*妹の麗景殿の御方に(お部屋に)行くに(行こうとしていた時に)、大将の(源氏が)御前駆を(おんさきを、先払いの後を)忍びやかに追へば(静かに進んでいると)、しばし立ちとまりて、　*「藤大納言」については、此処の記述で≪右大臣も藤原氏であることがわかる≫と注にある。「大納言」は≪律令制で、太政官(だいじょうかん)の次官。大臣に次ぐ官で、正三位相当。大臣とともに政務に参与し、大臣不参のときは代行した。亜槐(あかい)。亜相。おおきものもうすつかさ。(大辞泉)≫とある。　*頭の弁の妹が麗景殿女御ということは、帝の伯父の娘だから母血筋は別でも家筋では帝の従兄妹である。「麗景殿(れいけいでん)」は≪平安京内裏の殿舎の一。宣耀殿の南、弘徽殿の東にある。皇后・中宮などの居所。(大辞泉)≫とある。

「*白虹(はくこう)日を貫けり(ひをつらぬけり)。太子(たいし)畏ぢたり(をぢたり)」
*注に≪『史記』『漢書』にある文句。源氏が皇太子を擁して帝に謀叛を企てているようだが、成功しないぞと、あてこすって言ったもの。≫とある。また Wikipedia に「白虹貫日」は太陽が白く光る光学現象で、古代中国では兵乱の凶報＝反逆者にとっては吉報とされたとの説明があり、≪司馬遷（紀元前 145 年 － 没年不詳）の『史記』鄒陽列伝に「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」とあり、燕の太子丹（たん）の臣、荊軻（けいか）が始皇帝暗殺を謀った際、白い虹が日輪を貫き、暗殺成功を確信させたが、それでも丹は計画の失敗を恐れたという故事が見られる。≫という記述があった。ところで「白虹」は＜日の暈(かさ)＞という太陽が大きな輪を縁取って白く輝く稀な現象ということだが、何と 2009 年 6 月 6 日の今日、この現象が観測されたというニュースを NHK のテレビで見た。野球場に掛かる巨大な白い太陽の白い輪だった。奇遇だ。

と、いとゆるるかにうち誦じたるを(とてもゆっくりと口ずさんだのを)、大将、いとまばゆしと聞きたまへど(全く当て付けがましいとお聞きに為ったが)、咎むべきことかは(こうゆう揶揄は嗜める程惨めで、当主でも無い藤原惣領が其れを源氏に出来てしまう権勢の移ろいを身に染みてお感じになっていたのでしょう)。后の御けしきは(母后の源氏や中宮に対する態度は)、いと恐ろしう(本気で排除を探っていて)、わづらはしげにのみ聞こゆるを(嫌な事ばかり耳にされたが)、かう親しき人びとも(このように后の近親一族の者までも)、けしきだち言ふべかめることどももあるに(はっきりと嫌味を言い出すようになるのは)、わづらはしう思されけれど(不愉快にお思いに為ったが)、つれなうのみもてなしたまへり(知らん顔で関わらないようにしていらっしゃいました)。

［第五段　藤壷に挨拶］

「御前にさぶらひて(帝にお目に掛かっていまして)、今まで、更かしはべりにける(遅くなってしまいました)」と(と源氏は中宮に)、聞こえたまふ(申しなさいます)。

月のはなやかなるに(月が明るかったので)、「昔、かうやうなる折は、御遊びせさせたまひて(院が楽器の演奏を御させに為って)、今めかしうもてなさせたまひし(賑やかに宴を開きなさいましたものを)」など、思し出づるに(中宮は思い出されて)、同じ御垣の内(みがきのうち、御所の中)ながら、変はれること多く悲し(様変わりが多く悲しまれました)。

「九重に霧や隔つる雲の上の、月をはるかに思ひやるかな」(和歌 10-22)

「綺麗な月を隠すのは、周り取り巻く黒い霧」(意訳 10-22)

*注に≪中宮から源氏への贈歌。「霧」は帝の周辺の悪意ある人々をいい、「月」は帝をいう。≫とある。また「九重(ここのへ)」は＜物が九つ、または、いくつも重なっていること。また、その重なり。(大辞泉)＞であり、＜昔、中国の王城は門を九重につくったところから宮中、禁中のこと。(同左)＞でもある。帝は故院の遺言に従って春宮への譲位をお考えのようだが、取り巻きの右大臣家勢がそれを阻みそうで心配だ、と中宮にしては随分はっきりと懸念を表している。

と(と中宮は)、命婦して(王命婦を介して)、聞こえ伝へたまふ(源氏にお伝えになります)。ほどなければ(源氏は直ぐ近くに居たので)、御けはひも(中宮の立てる衣擦れも)、ほのかなれど(仄かながら)、なつかしう聞こゆるに(懐かしく耳にされると)、つらさも忘られて(拒まれ続けた辛さも忘れて)、まづ涙ぞ落つる(思わず涙を落とされます)。

「月影は見し世の秋に変はらぬを、隔つる霧のつらくもあるかな　(和歌 10-23)

「綺麗な月を隠すのは、一途なまでの頑なさ　(意訳 10-23)

*この源氏の返歌は言葉使いも意味も中宮と同様で、一見すると親心の唱和のようでもあるが、それも建前では臣下であり、春宮も弟御であってみれば、然程穏やかな口調でもない。それでも敢えてこう詠んだのは、「月」に＜中宮＞を重ね、「霧」に＜拒む心＞を重ねて、中宮への怨み節となっているからに他ならない。

*霞も人のとか(道を遮る霞みは人の気持ちも隔てるとか)、昔もはべりけることにや(昔も言って在るようですから)」など聞こえたまふ(などと源氏は中宮にお答えなさいます)。
*「昔もはべりける」「霞も人の」というのは≪『奥入』は「山桜見に行く道を隔つれば霞も人の心なるべし」(出典未詳)を指摘する。≫と注にある。

宮は(中宮は)、春宮を飽かず思ひきこえたまひて(東宮と別れるのを名残惜しんで御出でのようで)、よろづのことを聞こえさせたまへど(色々話して聞かせ申しなさったが)、深うも思し入れたらぬを(東宮があまり良くお分かりで無いようなのが)、いとうしろめたく思ひきこえたまふ(とても気掛かりになっていらしたようでした)。例は(いつもなら)、いととく大殿籠もるを(もうとっくに御休みになって御出でなのに)、「出でたまふまでは起きたらむ(中宮が御帰りになるまでは起きていよう)」と思すなるべし(とお思いになって御出でなのでしょう)。恨めしげに思したれど(東宮は中宮が御帰りになるのを恨めしげにお思いでしたが)、さすがに、え慕ひきこえたまはぬを(さすがにとても後を追い縋りはお出来に為らないのを)、いとあはれと、見たてまつりたまふ(中宮はとても感慨深く思い申しなさいます)。

[第六段　初冬のころ、源氏朧月夜と和歌贈答]

大将、頭の弁の誦じつることを思ふに(頭の弁が口ずさんだ謀反を咎めるような史記の鄒陽列伝の文言に)、御心の鬼に(東宮についての中宮との秘密を思えば良心の呵責を覚えなさって)、世の中わづらはしうおぼえたまひて(人間関係に際どい危うさをお感じになって)、尚侍の君にも訪れきこえたまはで(尚侍の六の姫君にもお手紙を差し上げ為さらないようになって)、久しうなりにけり(久しくなっていました)。

*初時雨(はつしぐれ)、いつしかと(何時の間にか)けしきだつに(降り出す頃に)、いかが思しけむ(何を思ったか)、かれより(尚侍の方から)、　*注に≪「時雨」は晩秋から初冬の景物。季節は晩秋から初冬に移る。≫とある。

「木枯の吹くにつけつつ待ちし間に、おぼつかなさのころも経にけり」(和歌 10-24)

「このまま冬になりそうで、心細くて堪りません」(意訳 10-24)

*注に≪朧月夜尚侍から源氏への贈歌。源氏から便りがないことを嘆いた歌。≫とある。特に含みも無さそうで、字数は踏んでいるが普通の手紙文の内容に見える。「木枯らしが吹く度に待っていましたが、便りの無いまま随分日が経ちました」と、ほぼ言い換えなくても其のまま今でも通じる程の率直さだ。それだけに、困難な状況を押してまで書いて遣した女心が身に染みる。歌としての出来はともかく、こういう手紙を男は受け取りたい、と私も思う。

と聞こえたまへり(と言って御出でに成りました)。折もあはれに(季節柄も趣き深く)、あながちに忍び書きたまへらむ(非難を忍んでお書きに為ったであろう)御心ばへも(切ないお気持ちが)、憎からねば(身に染みて)、御使とどめさせて(尚侍の文遣いを待たせて)、唐の紙ども入れさせたまへる御厨子開けさせたまひて(上質の唐紙類をしまって置かれ為された戸棚を)開けさせたまひて(開けさせなさって)、なべてならぬを選り出でつつ(特に上質の物を選び出して)、筆なども心ことにひきつくろひたまへるけしき(筆類も念入りに毛並みを整えなさる源氏の姿勢が)、艶なるを(色気づいて)、御前なる人びと(見ていた女房達は)、「誰ればかりならむ(お相手は一体誰なのだろう)」とつきじろふ(と目配せを交し合っていました)。

「聞こえさせても(お便りを差し上げても)、かひなきもの懲りにこそ(思うように会えないのが辛いので)、むげにくづほれにけれ(すっかり気落ちしていました)。*身のみもの憂きほどに(お便りをしなかったのは、私など物の数に入らないと憚られたものですから)、*注に＜『源氏釈』は「数ならぬ身のみもの憂くおもほえて待たるるまでもなりにけるかな」（後撰集雑四、一二六〇、読人しらず）を指摘する。＞とある。「物の数に成らないとばかり御自分の立場を情けなく御思いでも御手紙は待たれているのです」という引歌を詠まれた側から裏返した言い方だろうか。

あひ見ずてしのぶるころの涙をも、なべての空の時雨とや見る　(和歌 10-25)

偲ぶ涙の時雨空、気紛れなんかじゃありません　(意訳 10-25)

*尚侍の「おぼつかなさのころ(様子が分からない此の頃)」を「あひみずて(逢えないので)」と受けた源氏の返歌。趣は初冬の季節柄の「時雨(しぐれ)」を「空の(ただの)」＜通り雨＞と＜涙＞に重ねて、私の＜偲び恋は＞そんな「なべての(通り一遍の)」「とや見る(気持ちではない)」と訴えている、のだろう。

心の通ふならば(心が通じているなら)、いかに*眺めの空も(模様眺めのようにどんなに長い間お便りしない空虚さも)もの忘れしはべらむ(紛らわして忘れて頂ける事でしょう)」

など、こまやかになりにけり（情愛の深いお返事でした）。　*注に＜「ながめ」は「長雨」と「眺め」の掛詞。「時雨」の縁語。＞とある。歌にも優る凝った言い方。

　かうやうにおどろかしきこゆるたぐひ（このように女の方から源氏の気を引くような手紙の類は）多かめれど（他にも色々在ったようでしたが）、情けなからずうち返りごちたまひて（源氏は愛想良くお返事申し為されても）、御心には深う染まざるべし（深い印象は御持ちに為らなかったようです）。